17　次の文章は、『平家物語』の一節である。平清盛を中心に一時の栄華を築いた平家一門は、源ら反平家勢力が迫る中、都を逃れて西へ向かう。皆が家族を連れて都を去る中で、平（中将）だけは愛する妻子のためを思い、都に残して一人で去るという苦渋の決断をした。しかし妻子と離れて生きることに希望を失った維盛は、ひそかに一族のもとから抜け出してのもとで出家を果たし、その導きで三山を参詣した後、極楽往生を願いの沖で入水する。この場面を読んで、後の問いに答えよ。

〈香川大〉二〇二二年度出題

　〈注１〉の山の参詣、ゆゑなく遂げ給ひしかば、の宮と申す王子の御前より、の舟にさして、のに浮かび給ふ。遥かの沖に山なりの島といふ所あり。それに舟をこぎ寄せさせ、岸にあがり、大きなる松の木をけづッて、中将を書きつけらる。

　「、太政大臣公、。

　　、内大臣左大将公、法名。

　　三位中将、法名、廿七歳、寿永三年三月廿八日、の沖にて入水す」

と書きつけて、又沖へぞこぎ出で給ふ。①思ひきりたる道なれども、今はの時になりぬれば、心細う悲しからずといふ事なし。

　は月廿八日の事なれば、かにみわたり、あはれをもよほすたぐひなり。ⓐただの春だにも、暮れ行く空は物憂きに、や今日を限りの事なれば、さこそは心細かりけめ。沖のの浪に消え入るやうにおぼゆるが、さすが沈みもはてぬを見給ふにも、 ②の上とやしけん。おのがひきつれて、今はと帰るがねの、をさして鳴きゆくも、ふるさとへことづけせまほしくがの恨みまで、思ひ残せるくまもなし。「されば、こは何事ぞ。〈注６〉の尽きぬにこそ」と思しめしかへして、に向かひ手を合はせ、念仏し給ふ心のうちにも、「すでに只今を限りとは、にはいかでか知るべきなれば、のたよりのことつても、ⓑ今や今やとこそ待たんずらめ。にはかくれあるまじければ、世になきものと聞いて、いかばかりか嘆かんずらん」なンど思ひつづけ給へば、念仏をとどめをりに向かッてひけるは、「あはれ、人の身に、③妻子といふものをば持つまじかりけるものかな。此世にて物を思はするのみならず、の妨げとなりける口惜しさよ。只今も思ひ出づるぞや。かやうの事を心中に残せば、罪深からんなる間、するなり」とぞ宣ひける。

〈注〉

　１　三の山―熊野三山。

　２　浜の宮と申す王子―那智の海辺近くにある神社。

　３　銘跡―官位・姓名などを書き記したもの。

　４　三月廿八日―当時の暦では春の末。

　５　蘇武が胡国の恨み―蘇武が胡国の捕虜になった時、雁に故郷への手紙を託したという、中国の故事を踏まえる。

　６　妄執―迷いや執着の心。死後、極楽往生を果たすには、それらを捨てて一心に念仏を唱えることが求められた。

　７　西―極楽浄土のある方向。

　８　都にはいかでか知るべきなれば―都に残してきた妻子は知るはずもないので。

　９　風のたよりのことつて―風が運ぶようなはかない音信。

　10　合掌を乱り―合掌の手を崩し。

　11　聖―維盛を出家させた聖。維盛の極楽往生を助けるため舟に同乗していた。

問１　傍線部ⓐ「ただ大方の春だにも」、ⓑ「今や今やとこそ待たんずらめ」をわかりやすく現代語訳せよ。

問２　傍線部①「思ひきりたる道なれども、今はの時になりぬれば、心細う悲しからずといふ事なし」から読み取れる、この時の維盛の心情について説明せよ。

問３　傍線部②「我身の上とや思しけん」とはどういうことか、説明せよ。

◎問４　傍線部③「妻子といふものをば持つまじかりけるものかな」とあるが、維盛がこのように思ったのはなぜか、本文全体を踏まえて説明せよ。

問５　『平家物語』冒頭の一文に示されている、作品全体に流れている仏教的価値観を漢字四字で答えよ。

【解答と採点基準】

問１　ⓐ＝Ａただ単にＢ普通の春Ｃでさえも

Ａ＝２

Ｂ＝３〔「普段・いつも」も可。〕

Ｃ＝５

　　　ⓑ＝Ａ都の妻子はＢ今か今かという思いで待っているだろう

Ａ＝３

Ｂ＝７〔現在推量として訳出されていなければ減点３。〕

問２　Ａ一人で入水して死ぬことを決意したが、Ｂいざ臨終となると、Ｃ頼りなく不安で切なくなるという心情。

Ｃが０の場合は全体０。

Ａ＝４〔具体的でないものは０。〕

Ｂ＝２〔同意表現可。〕

Ｃ＝４

問３　維盛が、Ａ波に消え入りそうになっては完全には沈んでしまわない沖の釣り舟と、Ｂ生き死にを迷っている自分自身を重ねているということ。

釣り舟に自分自身を投影するという趣旨のないものは０。

Ａ＝４〔沈みそうで沈まないという説明がなければ０。〕

Ｂ＝６〔同意表現可。〕

問４　Ａ妻子の存在が入水の決断からためらいに至る現世の物思いの種であり、かつ、Ｂ残される妻子への心配が後世の極楽往生の妨げとなるから。

妻子が「物思いの種」かつ「極楽往生の妨げ」であるという二点の要素が揃っていなければ全体０。

Ａ＝５〔入水に対する気持ちの説明がなければ減点３。〕

Ｂ＝５〔生き残る妻子への心配という趣旨がなければ減点３。〕

問５　諸行無常

【現代語訳】

（維盛中将は）熊野三山の参詣は、差し障りなく果たしなさったので、（那智の海辺近くにある）浜の宮と申す王子社の御前から、一隻の舟を棹で進めて、遠くの青々とした海に浮かびなさる。遠くの沖に山なりの島という所がある。そこに舟をこぎ寄せさせ、岸に上がり、大きな松の木を削って、中将は、官位・姓名などを書き記しなさる。

　「祖父は、太政大臣平朝臣清盛公で、法名は浄海。

　　父親は、内大臣兼左大将重盛公で、法名は浄蓮。

（私は、）三位中将維盛、法名は浄円、年齢は二十七歳、寿永三年三月二十八日、那智の沖で入水する」

と書き記して、再び沖へ漕ぎ出しなさる。（自ら）決意した（死出の）道であるけれども、死に際の時になったので、頼りなく不安で切なくないということはない。

　時分は（春の末、）三月二十八日のことであるので、海路は遠くまで一面に霞み、感慨を催すような眺めである。問１ⓐただ単に普通の春でさえも、（春が）暮れていく空はつらい（様子な）のに、まして今日を最期とすることであるので、そのようには頼りなく不安だったのだろう。沖の釣り舟が波に消え入るように思われるが、そうはいってもやはり完全には沈んではしまわない様子をご覧になるにつけても、自分の身の上（と同じ）だとお思いになったのだろうか。自分の一行をひきつれて、もはや（越冬の時季は過ぎた）と帰る雁が、北陸地方を目指して鳴き（ながら渡って）ゆくの（を見て）も、（雁に手紙を託して）故郷へ伝言をしたくて、蘇武が胡国の捕虜になったとき、雁に故郷への手紙を託したという中国の故事まで（思い出されて）、何から何まで思い残したことばかりである。「いったい、これは何事か。やはり迷いや執着の心が尽きないのだろうか」と思い返しなさって、極楽浄土のある西方に向かい合掌し、念仏を唱えなさる内心でも、「すでにを（私の命の）限りだとは、都に残してきた妻子は知るはずもないので、風が運ぶようなはかない音信も、問１ⓑ都の妻子は今か今かと（いう思いで）待っているだろう。（このこと〔＝自分の入水〕は）今にはっきりとわかるだろうから、（自分が）この世になきものと（なったと）聞いて、（妻子は）どれほど嘆くだろうか」などと思い続けなさるので、念仏を唱えるのを止め、合掌の手を崩し、聖に向かっておっしゃったことは、「ああ、人の身に、妻子というものは持つべきでなかったものだなあ。現世で物思いをさせるだけでなく、後世の極楽往生の妨げとなった残念なことであるよ。只今も思い出すのだよ。このようなことを心中に残すと、罪深い（身である）そうだから、仏前で告白して悔い改めるのだ」とおっしゃった。